

事業名称	感覚をひらくー新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業		
実行委員会	新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会		
中核館	京都国立近代美術館		
	住所	〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 26-1	
	TEL	075-761-4111	FAX 075-771-5792
	ホームページ	www.momak.go.jp	
構成団体	国立民族学博物館、きょうと障害者文化芸術推進機構、京都府立盲学校、京都教育大学、京都市立芸術大学		
事業開始時点の課題分析	京都国立近代美術館では、平成 29 年度から地域の視覚障害者、盲学校、大学等と連携し、ユニバーサルな（誰もが楽しめる）美術鑑賞のあり方を探る事業を進めている。この活動により、視覚以外の感覚を用いる美術鑑賞により、作品の魅力を従来とは異なる角度から再発見できるほか、鑑賞者どうしの相互理解も促進されることが示された。またヒアリングの結果、盲学校での美術鑑賞教育の充実が望まれているという実態も明らかとなった。引き続き、視覚障害者との作品鑑賞を通じた美術鑑賞の発展的解決に向けて、美術館という場所や所蔵品を生かした取り組みが急務である。		
事業目的	本事業の目的は、美術館が地域の視覚障害者、盲学校、大学などと共働し、所蔵作品を活用しながら、障害の有無にかかわらず誰もが楽しめる（ユニバーサルな）美術鑑賞プログラムを構築し、広く発信することである。平成 29 年度に引き続き、視覚優位となっている現状の美術館にとって縁遠い存在である視覚障害者にも、おもに焦点を当てる。そして、視覚障害者の美術鑑賞のあり方を手がかりにしながら、具体的なイベント実施を通して実践し、方法論の検討・開発をおこない、事業後も継続的なプログラム開発をおこなう。		
事業概要	<p>（1）京都国立近代美術館の所蔵品（陶芸、金工、彫刻等の立体作品）を活用しながら、障害の垣根を超えて「手で触れる」「音を聞く」「においをかぐ」等の体験を通して、本物の理解を深める機会を継続的に設けた。また参加者同士が対話することで感じ方の違いへの気づきが起こり、相互理解が促進されることから、新たな美術鑑賞が共生社会の実現に寄与する可能性も示された。</p> <p>（2）視覚障害者の来館のきっかけになるよう、所蔵作品 3 点についての触察ツール（さわる図と文章）を、視覚障害者と共働して制作し全国へ配布した。</p>		
実施項目 ・ 実施体系	<p>（1）地域文化の発信の核となる美術館・歴史博物館</p> <p><input type="checkbox"/>ア 美術館・歴史博物館の情報発信、相互連携</p> <p><input type="checkbox"/>イ ユニークベニューの促進</p> <p><input type="checkbox"/>ウ 地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館</p> <p><input type="checkbox"/>エ 地域に存する文化財を活用した地域共働の創造活動や地域の魅力の発掘・発信</p> <p>（2）あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動</p> <p><input type="checkbox"/>ア 小・中・高等学校と連携した地域文化の担い手の育成</p> <p><input type="checkbox"/>イ 大学等と連携した国内外で活躍する文化人材育成プログラムの開発</p> <p><input type="checkbox"/>ウ 社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>エ 障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援等の事業</p> <p>（3）新たな機能を創造する美術館・歴史博物館</p> <p><input type="checkbox"/>ア 観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等他分野との連携・融合による活動</p> <p><input type="checkbox"/>イ 文化財の新たな保存管理・活用の手法の開発</p>		

<p>実施後の 成果・効果等</p>	<p>視覚以外の感覚を用いた美術鑑賞の実践のため、主に工芸・立体作品を活用しながら各種の鑑賞プログラムを夏に実施した。全4回のイベントを実施し、計270名超（同伴者を除く）の参加があり、アンケート回答のうち91%が「とても良かった/良かった」と回答した。「美術のさわやかツアー」では、点字入りチラシの作成など広報にも力を入れたことで、参加者86名のうち24名が視覚障害者と、これまでの活動の中で最も多い割合となった。参加者からは視覚に依らない美術鑑賞に対する前向きな反応が多数あったことに加え、見える・見えないに関わらず、様々な感性を持つ人たちがコミュニケーションを取りながら鑑賞を行うことで、鑑賞体験がより豊かになることが示された。また冬に実施した盲学校との連携事業については、はじめて京都府立盲学校の授業という位置づけで実践ができた。その重要性が再認識され、今後も「さわって楽しむこと」「美術を身近に感じることを目指した取組みを共に検討していくことを確認した。</p> <p>さらに、視覚障害者の来館を促す環境整備として、所蔵品3点について触図と文章で学ぶ触察ツール「さわるコレクション」を1,000部発行した。制作過程において障害当事者から試作品への意見聴取を行ったほか、昨年度のツールの利用者への追跡調査を行いツールの扱いやすさや図の分かりやすさについて改善を行った。完成したツールは、全国の盲学校、ライトハウス、点字図書館など約200箇所へ送付し、美術作品を身近に親しむきっかけとしていただいた。</p>
------------------------	---

【事業実績】

京都国立近代美術館を中核として、地域の大学、盲学校、視覚障害者共働しながら、視覚以外の感覚を用いる新しい美術鑑賞プログラムの構築およびプログラムの継続的な実施にむけ、主に以下の取組みを行った。

(★はメディア掲載情報)

1. 視覚以外の感覚を用いた美術鑑賞の実践

■京都国立近代美術館の所蔵品を用いたさわる鑑賞体験の提供

美術のみかた、みせかた、さわやか
実施日：2018.8.10-11 参加者：186名

京都国立近代美術館所蔵の立体作品と陶芸作品12点について、①作品への理解を深めること、②作品が置かれている空間全体にも意識を向けて身体感覚で感じることをねらいとして、「美術のさわやかツアー」「美術のみせかたツアー」「おしゃべりツアー」を実施した。

★京都新聞 2018.8.11 朝刊「美術作品、指や耳使い「鑑賞」
京都国立近代美術館」、NHK 京都 2018.8.10「京いちにち」



<主な感想>

- ・ とても充実感がありました。作者はどんな風に作品を作り上げたのだろう？何を表現したかったのだろう？と正解はわかりませんが思いめぐらしながら、他の参加者と言葉をかわしながらのワークショップはとても楽しかったです。
- ・ 普段できない「作品にさわる」という経験をして、自分がどれだけ視覚によって美術鑑賞をしているかを知りました。「さわる」ことで「見る」ことにも変化が生まれそうです。

手だけが知ってる美術館 第1回 茶道具
実施日：2018.11.11 参加者：31名

京都国立近代美術館所蔵の茶道具(茶碗、棗、花入など)21点を用いて、視覚以外の感覚、特に「さわる」ことによってその新たな魅力を発見し、障害の有無を越えて作品をともに体感する場を設けた。視覚障害のある方が各グループに入っておられたことで、視覚情報と触覚情報による捉え方の違いへの気づきが生まれ、対話が弾んだ。



<主な感想>

- ・ 作品に触れることで、作者と同じものに触れている体感を共有している気持ちになった。
- ・ 見えない方に、見えていると思っていることで逆に見えなくなっている部分があると言われ、目からウロコでした。

手だけが知ってる美術館 第2回 染織

実施日:2019.3.30 参加者:23名

作家と共に、大きな染織作品をその素材や質感などに注目しながら手で触れて鑑賞した後、アイマスクをつけて視覚を使わずにショートマフラーづくりに挑戦した。

京都府立盲学校と京都国立近代美術館による連携授業

実施日:2018.12.20 参加者:生徒11名

盲学校における美術教育の充実をねらいとして、高等部の生徒を対象に、授業を実施した。「海」をテーマにした陶芸作品を手で触れて対話しながら鑑賞を深めた後、自分にとっての「海」のイメージを、さまざまな素材を用いて表現した。美術館や美術作品へのイメージの転換が起こり、授業の実施の重要性が再認識された。来年度以降も継続的な実施にむけて、既に検討を始めている。



<主な感想>

- ・ 海の作品を鑑賞して、これまで、1つのものを1つの作品として触ったことしか無かったので、同じ作品でも色々な表現のしかたがあると知ることができた。(全盲の生徒)
- ・ 非常に有意義な時間でした。できれば毎年続けてほしい。特に「美術」を選択していない生徒にとっては芸術分野に触れるよい機会だと思う。(教員より)

■視覚障害者の鑑賞支援にむけた各種ツール等の研究開発

「さわるコレクション」(3作品、各1000部)

視覚障害者の来館のきっかけとなるようなツールとして、平成29年度に引き続き、代表的な所蔵品3点(日本画、現代陶芸、デザイン)について、さわって形を把握する触察シートと展示の解説文で紹介した。地域の見えない方から試作品への意見を頂き、よりよいツールになるよう工夫を行った。完成したツールは全国の盲学校・ライトハウス、主要な美術館博物館へ発送、館内でも配布中。



★京都新聞 2018.5.22 夕刊「洛中洛外」、読売新聞 2018.5.22 「見えない芸術さわって鑑賞」、中日新聞 2018.5.27「美術品さわって」、点字毎日 2018.7.05「資料『さわるコレクション』イメージつかみやすく」

2. プログラムの継続した運営と発展的展開

研究会

実施日

視覚に依らない鑑賞プログラムの実践について、鑑賞プログラムを企画・実施し、参加者の反応やアンケートの分析を行うなど成果と課題の整理を行い、その後の事業展開を検討した。



トーク&ディスカッション「美術館のあたりまえって？」

実施日:2018.3.12 参加者:79名

本事業の今後の展開においてキーワードとなる「障害のある方との共働」「当たり前を問い直す場を作ること」について考えを深めるため、美術家の高嶺格氏を招いてイベントを開催した。

<主な感想>

- ・ 視覚障害者と健常者の「つながり方」はたくさんあるが、あえて美術館という場やアートという媒体をもちいることでどのような相互理解が得られるのか、その意図がよくわかった。
- ・ “見える”ことが“健常”と考えることから“見えない人”へ何かしてあげなければならないと思うことが当たり前のようである中、“見えない人”にアテンドしてもらった逆転の鑑賞は非常に興味深い。

事業全体を通しての成果と課題

1. 成果

- ・ 所蔵作品を活用し、従来とは異なる新しい美術鑑賞の機会を継続的に提供することができた。
- ・ これまでの鑑賞の“当たり前”を問い直すうえで、視覚障害者の介在の重要性が再認識された。
- ・ 盲学校と美術館との連携関係が生まれた。

2. 課題・今後に向けて

- ・ 引き続き「所蔵品の活用」「視覚だけに依らない鑑賞」を軸に、プログラムを継続的に実施する。
- ・ 継続的な事業運営に向けた具体的な方策検討。
- ・ 美術館、視覚障害者、作家／専門家が協働し、これまででない、ユニバーサルな鑑賞プログラムを構築する取組みに着手する。